青蘿発句注解　六

富田志津子

はじめに

本稿は「青蘿発句注解一～五」（『姫路獨協大学外国語学部紀要』三〇・三二、『国際言語文化論集』一・二、三　2017年2月、2019年2月、2020年2月、2021年2月、2022年2月、以下「注解一～五」と略称する）に続くものである。栗の本青蘿が生涯に詠んだ発句を、年代のわかるものは古い順にとりあげ、注解している。今回は寛政元年から同三年までの三年間に詠んだ発句、またはその間に出版された俳書に載るものを採り上げた。

とりあげた発句の多くは、栗の本一門の俳書に入集するものである。出典の一つである『はりまあんご』（寛政元年、瓜坊編）は漢字にすると「播磨庵居」。行脚俳人瓜坊が、播磨の青蘿を訪ね、その庵に滞在して編んだ集である。寛政元年の正月を青蘿のもとで迎えており、青蘿との歳旦三つ物や春興歌仙のほか、栗の本一門の四季発句などを収める。『うらあふぎ』（寛政元年、玉屑編）は「浦扇」。淡路の栗の本門人たちの集である。玉屑が中心となって淡路松帆の浦に芭蕉の「ひらひらとあぐる扇や雲の峰」の句碑を建立、「扇塚」と名付け同書を刊行した。青蘿は、塚の開眼供養俳諧の発句を詠み、また同書の序文を書いている。淡路島にも栗の本門人が多くいたことがわかる。跋文は几董である。『観月楼句集』（寛政元年、乙坡編）は、但馬の門人、長沢桃如の一周忌追善集。桃如生前の天明六年、青蘿は桃如宅（観月楼）に滞在しており、その時の発句は「注解五」に入れている。本稿は、桃如追善句と同書所収の四季発句をとりあげた。また、寛政元年に友人几董が亡くなり、その追善集『鐘筑波』（寛政二年、紫暁編）には、青蘿が詠んだ几董追善句が入る。

寛政二年十月、青蘿は二条家俳諧の宗匠となった。前の月に暁台が創始し、続いて第二回目の御会であった。俳諧の百韻は二条家当主が発句を詠み、宗匠の青蘿は脇句である。それとは別に「宿題」があり発句を献上したらしい。

二条家俳諧の記録には残らないが、『青蘿発句集』に「御宿題」と前書して記載されている。また翌年も三月に二条家俳諧に召され、同じく「御宿題」の発句を詠んでいる。

そしてその年（寛政三年）六月十七日、青蘿は没した。首にできた癰（よう）（腫れ物）が命取りであったらしい。追善集『水の月』（寛政三年、玉屑編）には、辞世吟と長い前書を載せている。辞世吟は、水の月をめがけて舟から飛び込む自分を詠む。文も句もダンディーである。

そこまでで青蘿の一生は終わりなのだが、翌年、門人の布舟が出版した『栗本集』は内題「栗の本両吟歌仙行」で、青蘿が門人と巻いた両吟歌仙三十六を収める。歌仙の成立年代の多くは不明だが、青蘿の生前のものに違いないので、発句を本稿に収めた。

一

以下、発句とその注解である。引用文や発句の文字のうち、漢字の旧字体は現行のものに直し、濁点、句読点を補った。また適宜、振り仮名も付している。

① 明星のいろを外山の花の春　　青蘿

春（花の春）　出典『はりまあんご』（寛政元年、瓜坊編）。『観月楼句集』（寛政元年、乙坡編）、『青蘿発句集』（寛政九年、玉屑編）にも入る。

【訳】新春、初日の出の前に、明星が輝いている、その色を映す山々には、はや春の気配がある。

【注】初春の空の清澄な明星を呼んでいる。『はりまあんご』は加古川で迎春した瓜坊の撰集。内題「播磨鹿児川栗之本　行脚瓜坊撰」。巻頭の三つ物の発句が当句。脇は其良、第三は瓜坊。

② 春興

鶯の木瓜（ぼけ）もいばらも初音哉　　青蘿

春（鶯）　出典『はりまあんご』。『青蘿発句集』にも入る。
【訳】鶯の初音が聞こえる。梅に鶯が風流な取り合わせとされるが、実際には、木瓜の木にも茨の木にも止まってその声を聞かせている。
【注】木瓜や茨は、和歌では詠まない。俳諧だからこその取り合わせである。瓜坊との両吟歌仙の発句。

③
春（芹）　出典『はりまあんご』。『青蘿発句集』にも入る。
芹（せり）うつ里を見るかに小田の雁　　青蘿
【訳】正月七日の朝、家々では一斉に七草をたたく。そんな里をながめているかのごとく、田打ち前の田んぼで、雁が遊んでいる。
【注】「芹うつ」は、正月七日、七草を調理するのに包丁でたたく。その頃まだ田打ちは始まっていないので、田んぼは広く雁が遊ぶ。『はりまあんご』「春の部一」の巻頭発句。

④
秋（後の月）　出典『はりまあんご』。『青蘿発句集』にも入る。
后（のち）の月蕎麦に時雨の間もあらね　　青蘿
【訳】後の月が美しい、ちょうどその頃、蕎麦を収穫する。初時雨が降るまで、もう間もないことだ。
【注】蕎麦は、『通俗志』で「植ゑる　七月、花　八月、苅る　九月」とある。後の月は九月、時雨は十月である。季節移りのはやさを詠む。「秋の部三」に入る。

扇塚開眼之俳諧

⑤
夏（青嵐）　出典『うらあふぎ』（寛政元年、玉屑編）。『青蘿発句集』にも入る。
声を添へて塚の名ひらけ青嵐　　青蘿
【訳】初夏の風よ、そよそよという音と共に、この扇塚の扇を開いて、名を運んで知らしめてくれ。
【注】「青嵐」は、青葉を吹き渡る風で、嵐ではない。気持ちよい初夏の風が、扇塚を開眼させるのである。『うら

あふぎ』は、玉屑らが淡路松帆の浦に扇塚を建立した記念集。本句は扇塚開眼供養の俳諧の発句、連衆は三十人、脇は玉屑。「寛政元年己酉四月十二日於願海寺興行」とある。

⑥　ころもがへうすきいのちを祝ひけり　　青蘿

夏（更衣）　出典『うらあふぎ』。『観月楼句集』（寛政元年、乙坡編）、『青蘿発句集』にも入る。

【訳】更衣して夏衣になった。その衣の薄さがうれしく、薄い衣に身を包む己が命を寿ぎたくなることだ。

【注】更衣は旧暦四月一日。扇塚開眼供養「一座探題」の巻頭句。

⑦　我いほはひる寝する間に青田かな　　青蘿

夏（青田）　出典『うらあふぎ』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】私の庵から見える田んぼは、私が怠惰な生活をして、昼寝をしている間に、いつの間にか、田植えがすみ、青田になっている。

【注】青田は、稲の葉が青々と成長した田。昼寝している間に田植えが終わった、とする。「我いほは」は百人一首の「我庵は都のたつみしかぞすむ　世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師」による。脇は「うつればかはる雉子は水鶏に　玉屑」で、鳥の移り変わりで応じている。玉屑との両吟歌仙の発句。

⑧　宵闇の名もある里か梅の花　　青蘿

春（梅の花）　出典『観月楼句集』（寛政元年、乙坡編）。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】宵闇の里、その名の通り宵闇の今、梅の花の色は見えなくても香りは隠れることなく漂っている。

【注】梅の花の「色こそみえね名やは隠るる」（古今集、みつね）の性質を詠む。『観月楼句集』は但馬の栗の本門人長沢桃如の一周忌追善集。「宵闇」の地名がどこなのか不明。「四季発句」春の部所収。

⑨　寝そびれし夜ぞと思へば今朝の秋　　青蘿

秋（今朝の秋）　出典『観月楼句集』

【訳】昨夜は暑くて眠れなかった。しかし、立秋の今日、朝の空気はすっかり秋、それがうれしい。

【注】「四季発句」秋の部の巻頭句。

⑩　山茶花や雀顔出す華の中　　青蘿

冬（山茶花）　出典『観月楼句集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】山茶花が咲いている。たくさん咲いている花の間から、雀が顔を出す。花を食べているのか、虫を食べているのか、なんとも可愛いことだ。

【注】山茶花と雀の取り合わせが珍しい。「四季発句」冬の部所収の句。

⑪　雪まへや岡の月夜に大根引（だいこひき）　　青蘿

冬（雪）　出典『観月楼句集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】そろそろ雪が降り始める頃、雪が降る前にと、畑では月夜に大急ぎで大根引きをしている。

【注】「岡」は畑。農家の生活を詠む。「四季発句」冬の部所収の句。

⑫　涙には染ずもまつの秋の声　　青蘿

秋　出典『観月楼句集』。『青蘿発句集』にも入るが、下の句「秋の風」。

【訳】松は色を変えることがなく、秋風に松の音を響かせている。それはちょうど、血の涙に染まることなく、死者を悼んで慟哭している私のようだ。

【注】桃如追善の句。青蘿発句、五畔脇、乙坡第三の九吟歌仙の発句。「寛政元己酉九月十五日追悼俳諧之連歌」とあり、そのあとに長い前書の追悼文がある。

⑬ わが泪うつりて菊も黄なるかな　　青蘿

秋（菊）　出典『観月楼句集』（寛政元年、乙坡編）

【訳】私の涙の色が映ったのか、この菊は、白菊から黄菊に変わったようだ。

【注】桃如追善「一座捻香」の巻末発句。

琴弾山（ことびき）

⑭ 山は春琴の岩こす水の音　　青蘿

春　出典『観月楼句集』

【訳】山の春は水が動き始める。琴弾山から聞こえる音は、岩を越す水がさらさらと琴を弾くようにきこえる。

【注】『観月楼句集』「但州名所」所収の句。但馬の琴弾山の地名を詠み込む。兵庫県養父市にある「琴弾山」は、「琴引峠」または「琴引山」とも呼ばれる。八木城が羽柴秀吉に攻められて落城したとき、姫君がここまで逃げて琴を弾いたとされる。

⑮ 梅もどき小粒に赤し初しぐれ　　播磨加古川　青蘿

冬（初しぐれ）　出典『しぐれ会』（寛政元年、一萍編か）。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】冬になり、梅擬の小さな赤い実が美しい。折から降った初時雨が、紅葉と同じように染めたのだろう。

【注】「梅もどき」は梅擬。晩秋に実が深紅色になり、初冬まで残る。『滑稽雑談』に「梅もどき、冬に至りて実紅なり」とある。『しぐれ会』の「四来奉納」の部に入る。この年、青蘿は時雨会に参加していないが、玉屑が出座している。

⑯ 蒔つくし夜より鶴鳴く岡の麦　　播州　青蘿

冬（麦蒔）　出典『肥後のもの』（寛政元年、眉山編）。『青蘿発句集』に「蒔つけし夜より鶴なく岡の麦」として入る。

【訳】畑に麦を蒔き終わったその夜から、鶴の鳴き声が聞こえる。鶴がやって来て、畑を荒らしているのかもしれ

ぬ。

【注】「麦蒔」の季節は冬で、『毛吹草』などに十月として出る。「鶴きたる」は秋の季語。この発句は初冬の風景である。『肥後のもの』は眉山の筑紫行脚の記念集。青蘿の句は発句の「冬の部」巻頭句。

⑰ 燈（ともしび）もたよりも消る霜夜哉　　青蘿

冬（霜夜）　出典『鐘筑波』（寛政二年、紫暁編）。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】友人の几董が亡くなってしまった。この寒い霜夜に、灯火が消えたような辛い思いがする。彼の便りはもう来ないのだ。

【注】『鐘筑波』は几董追善集。几董は、寛政元年十月二十三日に没した。当句は、親しかった几董を悼む追善句。前書「夜半のあるじは風雅をともに相かたらふのひとりなりけるが、おのれに先だちて身まかりけるをかなしみ侍て」とある。

寛政二庚戌冬十一月十七日紅葉之御会（以下、文章略）

⑱ 日をいたゞきて冬もます穂の薄哉

冬　出典『青蘿発句集』

【訳】二条御殿に伺い、和歌の伝統をひしひしと感じます。お庭は冬景色ですが、日が射して暖かい。そこの薄は、かの『無名抄』で語られる登蓮法師のますほの薄のようでございます。

【注】寛政二年十月十六日、青蘿は第二回二条家俳諧の宗匠となる（前書の「十一月十七日」は間違い）。百韻は、二条家当主の発句に青蘿が脇を詠む。それとは別に、こうして発句も献上している。これには長い前書があり、「（前略）御庭のみまえにおしのぼりて鶯蛙のうたとなふる事のさゞれ石の千世経べき数〳〵生ふる草木の葉ごとのすゑ〳〵までも有難き色は冬のけしきもなげなるにぞ、そのこゝろを賦して奉るとて」とある。二条家の伝統を感じ、その庭の草木にも由緒をみとめている。

御宿題
殿前紅葉

⑲ 真砂までてりしく園の紅葉かな

冬（紅葉散る）　出典『青蘿発句集』

【訳】二条御殿の庭に落ちている紅葉は今まだ色美しく、その赤は敷かれている白砂に映って照り輝いている。

【注】⑱と同じ時の発句。宿題が出されていたらしい。

落葉支流水といへる御題をあるかたより給ふに

⑳ 吹ためて水に色添ふ落葉かな

冬（落葉）　出典『青蘿発句集』

【訳】紅葉した葉が落ちて、二条御殿のお庭の流水に浮かんでいる。風に吹きためられきれいな錦になって、水に色を添えているようだ。

【注】⑱⑲と同じ時の発句。二条家の役人からも題が出されるようだ。題は「落葉が水の流れをさまたげる」という意味。

辛亥三月十七日花之御会御宿題
殿前花

㉑ 我等までや御目通りの花のかげ

春（花）　出典『青蘿発句集』

【訳】我らのような身分の低い者まで、御殿に召され、満開の花の陰で二条様にお目通りできますことは、大変有難いことでございます。

【注】寛政二年の翌年三月十四日に、今度は春の花の会の宗匠として召された（「三月十七日」は間違い）。これも宿題の発句。

㉒ 花にさむく都の人をあらしやま　　播州 青蘿

春（花）　出典『花供養』（寛政三年、闌更編）。『青蘿発句集』に「花にさはぐ都の人よあらし山」として入る。

【訳】嵐山では、花が咲いてもにまだ寒い。都人を長くは居らせることはできないのである。

【注】地名の「嵐山」に、人を「在(あ)らせる」をかける。『青蘿発句集』では前書があり「あらし山の花は水涓々(けんけん)とさびしく松朧〳〵と深し。さらに我境ともおもはざりけるに」とあり、句は「花にさはぐ都の人よあらし山」である。その句では、「人々は花に集まって浮かれているが、嵐山の寂寞壮大な風景をみるがよい、とても我が物顔には騒いでおれまい」という意味になる。『花供養』に投句したあと、青蘿が改編したのであろう。

㉓ はな散りて三日月高し嵐山

春（花）　出典『青蘿発句集』

【訳】全山の花が散って、ようやく嵐山の上にかかる三日月にも目が行くようになった。

【注】㉒と同じ時の句。

㉔ 舟ばたや履(くつ)ぬぎ捨る水の月

雑　出典『水の月』（寛政三年、玉屑編）。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】自分は、あの水に映る月をめがけて、舟ばたから飛び込むのだ、履を脱ぎ捨てて。そしてあちらの世を訪ねよう。

【注】「水の月」は手に取れないもの、猿が取ろうとして失敗する。『水の月』は青蘿追善集。当句は、寛政三年六月十七日に没した青蘿の辞世吟で、発句を詠んだのは六月十一日。玉屑の「青蘿居士終焉記」に入る。長い前書があり、以下の通り。「誰をこひ、かれをまつべき身にしあらねど、此たび頭癰(づよう)といへるやまひ大瓠(おおひさご)ほどになれり。身にせまりていかんともなしがたかりけらし。此の大瓠の用かたあらんや。知あらばたそ用ることをしらむ。是多くは黄泉(よみ)に帰る舟につくらんか」。また、六月二十二日光念寺で行われた追善の根本式百韻の発句にもなっている。脇は玉屑「大千世界きよき涼風」。

㉕ 白げしに照りあかしたる月夜哉　　青蘿

夏（芥子の花）　出典『栗本集』（寛政四年、布舟編）。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】白芥子が咲いている。優雅なその白さは、月の光を受けてますます美しい。しかし、そんな短夜は、すぐに明けてしまうのだ。

【注】『栗本集』は、青蘿と門人の両吟歌仙集。乾巻の上下に、歌仙三十六巻を収める。坤巻もあったか、不明。青蘿の没後、門人の布舟が出版した。内題「栗の本両吟歌仙行」。この発句は巻頭歌仙の発句。脇は仏白で「蝶夏寒くたち出るなり」。

㉖ 秋ちかし薄（すすき）溢るゝ露の月　　青蘿

夏（秋ちかし）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】そろそろ秋の気配がただよう頃、穂の出始めた薄には夜露が溢れ、それに月が宿っている。

【注】第二歌仙、脇は重羽で「すみきる水に移る夏雲」。

㉗ 笹折て赤蟹なぶる夕すゞみ　　青蘿

夏（夕すずみ・蟹）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】夕涼みに水辺に出てみると、白砂の上を赤蟹が這っている。付近にはえている笹を手折って、退屈しのぎになぶったりしてみる。

【注】第三歌仙の発句。前書に「たばこの火など携へ、江のほとりに出。こゝろよげなる砂のうへにひとりふたりはいゐてあつさをしのぐとて」とある。砂浜の風景で、砂の白、蟹の赤、笹の緑が対照的。脇は桃如で「薄葉かきたる松の根あかり」。㉕㉖㉗の発句の歌仙のあと「此三つの発句わきせし人々は、但馬のくににおきて風雅の道に信ふかゝりしが、今は古人となりにき」とある。仏白、重羽、桃如は、但馬の人で、寛政三年には没していた。

㉘ 中〳〵に啼てねられねほとゝぎす　　青蘿

夏（時鳥）　出典『栗本集』

【訳】時鳥は、最初の一声を待つもので、そのために夜を徹することもあるが、頻繁に啼かれても、かえって寝られないものだ。

【注】第四歌仙の発句、脇は乙坡で「青さしにほふ信楽の宿」。百人一首に「時鳥啼きつる方をながむれば　はや有明の月ぞ残れる　後徳大寺左大臣」とあるように、明け方まで時鳥の声を待つ和歌は多い。この句は、啼きすぎて寝られないという滑稽。

㉙　みじか夜や蚕飼ふ家の窓明り　　青蘿

夏（短夜）　出典『栗本集』

【訳】飼家では、夜なべで仕事をしているのか、窓明かりが漏れている。しかし、夏の短夜は、はや明けてしまいそうだ。

【注】第五歌仙の発句。脇は五畔で「雨の降やむ垣の卯の花」。前書「世につかはるゝ業のはかなきを、つかはるゝ人はしらず」。短夜に仕事をするはかなさを詠む。

㉚　わすれずに松よりおろす風涼し　　青蘿

夏（涼し）　出典『栗本集』

【訳】以前ここを訪れた時も、この一本の松のもとで涼んだものだが、十年を経た今日、またここで納涼することになった。昔と同じく、松から吹き下ろしてくる風が、なんとも涼しい。

【注】第六歌仙の発句。脇は至峰で「円坐あたゝむ夏のくれ縁」。前書「十とせばかりも先になんありけるが、此一簀斎に来りて庭前の一木の松に朝夕をもてなされて、松ひと木馴てすゞみのたより哉と言ひ捨けるが、またことし納涼のころ松のもとに会て旅のあつさをいたはられて」とある。但馬大養父の至峰宅（一簀斎）を訪れての吟。

㉛　寝心や萌黄の蚊帳の薄月夜　　青蘿

夏（蚊帳）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】夏の夜、少々酒を飲んで寝る。そんな時、萌黄色の蚊帳を通して射す月の光が幻想的で、薄月夜の寝心地は浄土にいるようだ。

【注】第七歌仙の発句。脇は梅国で「団扇にのせる珠数のくりさし」。前書「飲酒三盃の寝ざめ去此不遠の浄土をしれり」。蚊帳を通してみる薄月夜は、浄土である。

㉜ 若草の廿日ばかりに花咲ぬ　　青蘿

春（若草・花）　出典『栗本集』

【訳】若草が萌えはじめたとみていると、二十日ほどしてはやくも花が咲き始めた。そんな春の日々は、うれしいものだ。

【注】第九歌仙の発句。脇は淇園「梺の垣根をつたふ陽炎」。春はどんどん闌けていく。

㉝ 花ほとゝぎす今宵の月のほとりなり　　青蘿

秋（月）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】一年を、春の桜、夏の時鳥と楽しんできて、仲秋の今日、私はすばらしい名月をながめているのだ。

【注】第十一歌仙の発句。脇は化麦「秋の最中も巳にゆく雲」。風流は巡る。

㉞ 春の山なに事もなき眺めかな　　青蘿

春（春の山）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】春になって緑が萌え始めた山、まだ桜が咲いているのでもなく、何があるわけでもない。しかしそれでも、春の気配に心が浮き立つものだ。

【注】第十二歌仙の発句。脇は李雨「烏帽子は棚にをきふしの梅」。「春の山」は春の季語。

㉟ あつき夜の蕣の花に明にけり　　青蘿

秋（蕣）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】残暑の夜、暑さで眠れなかったが、夜明けにふと見ると、もう朝顔が開きかけている。なんとも涼しげな様子に暑さを忘れることだ。

【注】第十三歌仙の発句。脇は木水「我影うごく椽の残月」。

㊱ 今日もまた霜はねかえす螽かな　　青蘿

冬（霜）　出典『栗本集』

【訳】稲刈りが終わった冬の田に螽が残っている。まだまだ元気で、あたりに降りた霜を跳ね返すように跳び回っていることだ。

【注】第十四歌仙の発句。脇は嵐外「麦蒔しまふ岡の十月」。「今日もまた」に冬の螽の強さとはかなさを籠める。

㊲ この比は八歩花見の世帯哉　　青蘿

春（花見）　出典『栗本集』

【訳】このところ桜は八分咲きだが、待ちきれずにいち早く花見をしている家族もある。

【注】第十五歌仙の発句、脇は松渓「独活や蕨をちらす杉の間」。

㊳ わか竹に月の薄ものかづけけり　　青蘿

夏（若竹）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】竹林の若竹を洩る月の光、まるで薄い布をかけたようで、幻想的な風景である。

【注】第十六歌仙の発句、脇は東圃「夢かとばかりにほふ廬橘」。月光を「薄もの」とする、繊細な表現。

㊴ 涼しさや惣身わする、水の音　　青蘿

夏（涼しさ）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】水の音が涼しい。体中に感じていた夏の暑さを、体ごと忘れてしまいそうだ。

【注】第十七歌仙の発句、脇は柴山「谷間をのぼる白雨の月」。

㊵　鎧著世（よろいきる）ならばいかに更衣（ころもがえ）　青蘿

夏（更衣）　出典『栗本集』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】今日は四月一日更衣の日、自分のような者は、夏衣に替えるのも簡単だが、鎧を着なければならぬ時代の武者であったら、どれほど大変だっただろう。平和な時代でありがたいことだ。

【注】第十八歌仙の発句、脇は右契「さす日しづかに牡丹芍薬」。鎧武者の更衣は発想がおもしろい。

おわりに

これで一応、制作年代のわかる青蘿発句を注解し終えた。今回は、青蘿晩年の句である。

明星のいろを外山の花の春

秋ちかし薄溢るゝ露の月

寝心や萌黄の蚊屋の薄月夜

涼しさや惣身わするゝ水の音

など、繊細な感覚の発句が多く詠まれている。これが青蘿の俳風となり、栗の本一門の模範となった。そうして青蘿は、二条家俳諧の宗匠まで登り詰める。しかし、これから円熟していくという時に没したのは、一門にとっても俳壇にとっても残念なことであった。

青蘿の発句はこれだけではない。『青蘿発句集』に載るものは六〇〇余り、載らないものを含めると八〇〇余りの発句を、私は把握している。「注解一～六」で紹介したのは、その一部でしかない。多くが年次不明である。今後、それらすべての青蘿発句を注解したいというのが私の願いである。

私ごとになるが、今年度をかぎりに退職する。ちょうど発句注解も一区切りを終えた。今後は有閑の身となり、残りの青蘿発句注解に精を出したいと思っている。

The Notes of Seira's Haikus Ⅵ

Shizuko TOMITA

This is the following study of "The Notes of Seira's Haikus Ⅰ to Ⅴ".

This time I wrote the notes on the haikus composed by Seira from 1789 (Kansei 1st) to 1792 (Kansei 3rd), the year he died, and the haikus from "Kurinomotosyu", which his pupil published in a year after he died. It has 40 haikus in total, including his farewell haiku.

It can be said that he was mature in his later years. He composed many haikus that are refined and eye-catching. He also had many pupils from a wide region: Harima, Tajima and Awaji. He lived up to his name of a great master of haiku.

This is the final paper of this study because of my retirement. In this study, I wrote the notes on his haikus which I can infer the periods of compositions.

After I retire, I will write the notes on his haikus which periods are not clear.